

活用事例⑨

島根県立出雲養護学校
中村 泰子・山本 恵美子

■活動した学年：高等部3年（希望者）

■主障害名：知的障害

■各教科等名：図書館（読書）活動、お話会

■学習形態：一斉視聴

■本の名前：

『へんしんオバケ』（紙芝居風）

■対象となる児童・生徒の実態

この学年は、2年次の国語の時間に『へんしんトンネル』（あきやまただし）を教材にして「へんしん言葉さがし」を行い、集めた言葉は壁新聞にして掲示するなどの学習をして楽しんでいる。

そこで、今回のお話会では、上手な声優さんの読み語りを楽しんでもらおうと、「わいわい文庫」から『へんしんオバケ』を選んだ。

■学習のねらい

- ・本を自分で読んだり、読んでもらったりする機会等を通し、本を身近なものに感じ、読書の楽しさを味わう。
- ・さまざまな内容やジャンルの本に触れ、自分の思いを伝えるための表現力の基礎となる言語感覚を磨く。

- ・自由参加のお話会に積極的に参加し、みんなといっしょに楽しむことができる。

■使用した道具・機材

プロジェクター、パソコン、スピーカー

■実際の様子について

- ・お話会の予告チラシに今回取り上げる「わいわい文庫」を紹介し、当日は職員朝礼時に告知し、参加を促した。教員の参加希望もあり、関心の高さを感じた。
- ・『おばけトンネル』を上映すると、生徒たちは大きな画面の迫力と巧みな読み語りに興味津々で、一緒に声を出して言ってみたり、ことばの変化を楽しんだりして、会場は笑い声に包まれた。
- ・「画面が大きいし、テンポよく語られていたので、よけい面白く感じた」（生徒）、「上手な声優さんの語りに引きつけられた。直接読み聞かせをする良さもあるが、この上映も良いと思う。素直に面白かった」（教員）などの感想を聞き、お話会での「わいわい文庫」利用に手応え

を感じることができた。大きな画面で上質の語りを、これからもみんなで一緒に楽しみたい。

■本に対する情報提供など

- ・大きな画面で見ることができるので、大勢での鑑賞に利用できる。
- ・ふだんの読み聞かせでは奥付までは読み上げないので、上映をどこで止めるか戸惑った。
- ・「わいわい文庫」には、高等部の生徒たちがみんなで楽しめるお話や絵

本がたくさん収録されていることがわかった。

- ・今回は積極的に参加して楽しんでいる生徒たちに誘われるように集まってきた、遠巻きに見ている生徒もあった。継続して利用していくことで、こうした生徒たちにもお話や本への関心をもたせたり、積極的に参加する態度を養ったりしていけると感じた。
- ・個人でいつでも読めるタブレットの利用もすすめていきたい。

